

正誤表

・ p8 図 1. 4
図中の[基本前額面]と、[基本矢状面]の記載が逆となります。

・ p160 図 9. 3
図中の[後部線維]は、正しくは【下部線維】となります。

・ p161 左コラム
正しくは、上の囲みの本文は
下の囲みの下に移動します。

僧帽筋上部線維の緊張の影響

僧帽筋上部線維の緊張は、肩関節の肩関節可動域 (ROM) を制限するだけでなく、掌上了肩甲骨帯や頭部の非対称と関係する。しかし、他の要因による肩甲骨帯上にも存在するため、純粋な僧帽筋上部線維の緊張を区別することは難しい。もし僧帽筋上部線維のみが緊張するならば、肩甲骨帯上部は肩甲骨上方回転に伴って出現するだろう。そのため、肩甲骨帯上を区別するには、注意深く肩甲骨帯の位置を評価することが必要である。僧帽筋中部線維は水平に位置する線維であるため、純粋な肩甲骨帯の軸に關与している。図161a本では、僧帽筋中部線維は3つの僧帽筋の中で、最も大きな横断面積を有する[31]。このように、僧帽筋中部線維は肩甲骨内転に大きな力を提供し、肩甲骨の安定性に重要な役割を果たす。肩甲骨をすくめる運動における筋電図を用いた研究は、肩甲骨帯上部より小さな僧帽筋上部線維を中部線維の上部が補助していることを示唆している[30]。

僧帽筋下部線維の作用

筋の作用：僧帽筋下部線維

作用	エビデンス
肩甲骨内転	あり
肩甲骨帯上	あり

僧帽筋下部線維の牽引は、のすべての作用に貢献する。このような役割は、僧帽筋上部線維に最も適していること牽引方向は、肩甲骨下側に直立位ではすでに上肢の肩甲骨帯に必要とされない。肩甲骨に及ぼす肩甲骨下側の量もたらされる[32]。僧帽筋下部線維の重要性は、僧帽筋に明らかである。これらの僧帽筋全体としての議論は

ここに移動

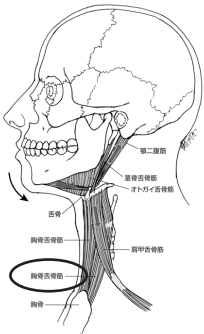
・ p174
(誤)「図 9. 22」 → (正)「図 9. 23」

・ p217 図 11. 24
図中の[橈側側副靱帯]は、正しくは【橈骨側副靱帯】となります。

・ p310「長橈側手根伸筋と短橈側手根伸筋の作用」の表
表中の[手関節掌屈]は、正しくは【手関節背屈】となります。

・ p353 図 17. 14 Aの図
図中の[中様筋]は、正しくは【虫様筋】となります。

・ p439 図 22. 11
正しくは【胸骨甲状筋】となります。



・ p451 図 23. 12 Aの図
図中の[関節内円板]は、正しくは【関節円板】となります。

・ p513 表 27. 1 表は以下の通り修正となります。囲みが修正箇所です。

群		作用			
		伸屈	屈曲	側屈	回旋
伸筋	大後頭直筋	両側		同側	
	小後頭直筋	両側			同側
	上頭斜筋	両側			同側
	下頭斜筋				同側
	頭半棘筋	両側、片側		同側	
伸筋	頸半棘筋	両側、片側		同側	
	頭・頸板状筋	両側、片側		同側	同側
	肩甲挙筋	両側、片側		同側	同側
	頭最长筋	両側、片側		同側	同側
	僧帽筋	両側		同側	対側
屈筋	胸鎖乳突筋		両側	同側	対側
	頸長筋		両側	同側	同側
	遠展筋		両側		同側
	外側頭直筋		両側	同側	
	前頭直筋		両側	同側	
斜角筋	斜角筋		両側	同側	対側

・ p702 6-7 行目
(誤) 大腿骨頭と寛骨臼の関節軟骨は、身体の中で最も厚い靱帯の1つである。
↓
(正) 大腿骨頭と寛骨臼の関節軟骨は、身体の中で最も厚い。

・ p864 図 45. 12
正しくは、右の図になります。
※第1版第2刷では修正済み。

